

聞き取り調査

- ・聞き取り調査について、応対して下さったのは施設長もしくは法人理事長
- ・できる限り、個人や固有名詞が特定できないよう配慮してあります。
- ・写真については、利用者の方が写らないことを前提として撮影しておりますので、施設によって撮影できた部分にばらつきがあります。

地域密着型老人福祉施設入所者生活介護 A



運営主体：社会福祉法人

開設年度：2008 年度

定 員：29 名

併設施設：認知症対応型共同生活介護

併設施設以外に運営主体が運営している施設：特別養護老人ホーム

《 設立のいきさつ 》

- ・行政からの入札に応募した。
- ・母体の特別養護老人ホームは定員が 100 名以上の大型特養であり、もう少し一人ひとりを大事にしたケアをしたいと考えていた。
- ・運営主体の理事長が自分の生まれ育った町に恩返しをしたいという考えがあり、地域も喜んで土地を紹介してくれた。

《 設立の流れで大変だったこと等 》

- ・立ち上げは特養のスタッフが主であったため、集団ケアから個別ケアへの戸惑いがあった。
- ・30 人のスタッフ募集に 100 人近くの応募があり、良い人材を得られた。(資格よりやる気と元気で選んだ)
- ・コンセプトは、「自分らしい我が家づくり」。

《 建物、設備で工夫した点等 》

- ・昔ながらの商店街に見合った、蔵造り風の建物。地域の人が出入りしやすい開放的な造りで、玄関に入って、すぐに地域交流スペースを設けたこと。
- ・面会の人もゆったり過ごせるような、フリースペースや大きなソファが各ユニットにある。昼寝をしていく人もいるという。
- ・嚴重な耐震対策がなされた建築構造(地下に何かできるかと思われたぐらい、基礎をしっかり作ってある)。

《 「地域密着」である工夫 》

- ・地域密着の良さは、地域の人しかはいれないこと。同じ学校出身の人がいたり、馴染みの人がいたりする。言葉が通じることが安心感につながる。
- ・ゆったりした生活ができる。29 人のことをよく知ることができ、29 人の家族とも馴染みになっている。
- ・特養との交流(押し花教室など)があるが、特養の利用者さんがここに来ると「静かでもいいね」

とおっしゃって下さる。

- ・認知症で落ち着かない人も、静かでゆったりしているので、行動が落ち着いてくる。

《 現在、運営・経営上で大変な点、工夫している点 》

・見た目の高級感の割には値段が高くない。収入と介護度により異なるが、一番高い方で 15 万円ぐらい。

・コスト節減に努める。例えば、人件費は、シルバー人材を活用し、一番大変な時間帯に入ってもらう。光熱費は、灯油は見積もりを出してもらい、一番安いところから買う。オール電化なので、節電の意識を職員にも高めてもらう。風呂は1ユニットに一つあるが、これはおひとりずつ変えるため、節約できない。車については、所有するのは軽自動車だけ。通院の時などは、母体の特養から車、運転手を借りる。

・普段は落ち着いた静かな生活を過ごしていても、利用者さんは非日常的な出来事を楽しみにしているので、ひなまつりやイベントを工夫している。例えば、今はちょうどひなまつりシーズンなので、打ち掛けやウェディングドレスのディスプレイし、利用者さんがお気に入りの打ち掛けに袖を通して記念撮影をするというイベントを行った。若い時に着れなかった内掛けやドレスを着れて、喜んでいただいている。今年は手作りでかつらも作った。また、マンドリン奏者のライブ等イベントを企画し、地域の人と楽しむようにしている。

- ・宮城県の特養と交換研修をし、お互いの良い点を勉強する。交換研修で学ぶことが多い。

《 運営推進会議について 》

・意見は活発に出る。

・商店街は、夜は真っ暗で閑散といているので、明り(非常灯)があるだけでいいと意見をいただいたり、クリスマスのイルミネーションも外さないで欲しいとの要望が出た。

・施設が防災拠点となりつつある。24 時間誰かがいるところは、他になく、近隣の避難場所には夜は誰もいない。そのため、施設が核となり地域に防災意識を広げ、いざという時の避難先になる。

・また、施設に何かあったときは、地域の力で協力してもらう。そのために、普段から地域の一員としてやるべきことはやって、風通しを良くしておきたい。

《 今後の見通し等 》

・職員を増員したい(現在はぎりぎりまわしている)

・職員の質を上げる。1 年目、2 年目と事故もクレームもなくやってきたが、これからも選ばれる施設になるためには、職員の質、接客サービスとしての質をあげることを大事だと考える。職員の質について、一番感じるのは若い人のコミュニケーション力が足りないこと。話が續かない。相手を退屈させないように、話を広げていくことができない。利用者はクリアな方も多いので、コミュニケーションは大事にしたい。そのために、利用者、その人の生き立ちや性格をよく把握してケアすることが大事と考えている(パーソナルケアの実践)。

《 その他 》

・地域の人への反応が良好で、地域を挙げて協力してくれる。

- ・地域交流スペースを地域の人にも利用してもらう。誰でも出入りできるようにしている。
- ・商店街の中にあるので、買い物がてらお茶飲みに立ち寄る、友達の顔を見るなどで訪れる人が多い。
- ・シルバーカーを押しながらの買い物で、話す人もいなくてさびしい人は、ここにくるとほっとするのかもしれない。お茶やコーヒーもサービスする。
- ・面会も多い。日に 10 組以上はある。アクセスが良いためであろう。お昼を近くのお店から出前してもらって一緒に食べたり、布団も貸し出すので家族が宿泊することもあり、これは個室のメリットである。
- ・施設のイベントも呼びかけると、40、50 人と来てくれる。みんな淋しいのではないかと思う。施設ができて、この近辺に人の出入りがあることも喜んでくれている。
- ・今年は、すぐ近くの神社の 5 年に 1 度のお祭りがあるので、祭りの協力をする。
- ・面会に来た人が、足りないものを商店街で買ってくれたり、商店街をのぞいたりしてくれるのでありがたいという声があった。



ドレスや内掛けの展示



地域交流スペース



ユニットの玄関



ユニット内の応接スペース



廊下



手すり

◇地域密着型老人福祉施設入所者生活介護Aのまとめ

- ・設立については、特別養護老人ホームのケアから、一人ひとりを大切にしたいとユニットケア（個別ケア）を志した。
- ・経営上の工夫として、母体の特別養護老人ホームの諸施設の協力がある。
- ・他施設との交換研修あり。
- ・商店街に隣接という立地条件もあり、地域の人との交流が多く見られる。
- ・商店街の活性化に役に立っている部分がある。
- ・今後力を入れていきたいことは職員の質の向上、つまりはケアやサービスの質の向上。
- ・地域の人にとっても活性化、人的交流、防災等、大きな期待が寄せられていることがうかがえる。

地域密着型老人福祉施設入所者生活介護 B



運営主体：社会福祉法人

開設年度：2009 年度

定 員：29 名

併設事業所：短期入所生活介護 11 床

併設施設以外に運営主体が運営している事業：認知症対応型共同生活介護事業、認知症対応型通所介護、居宅介護支援事業所、就労支援継続B型、障がい者グループホーム、

《 設立のいきさつ 》

- ・これまでは認知症の高齢者が身体的に衰えた場合、他の施設や病院に移らざるを得なかった。個々に深く関わりながら、別れるのは辛いとの職員の声が以前からあった。終の棲家としての特養があるのは心強い。
- ・認知症の方々の持つ内的世界の豊かさに惹かれてきた。高齢期は人間の叡智そのものであり、そこから学び取るべき事柄はあまりに豊かで多様である。そうした叡智の発見を、これまでの経験を活かして、特養という現場でも実践し社会に提言していく使命を感じた。
- ・グループホームでは積極的にターミナルを引き受ける環境がない。「死」をどう生きるかというテーマは今後ますます重要な問いになってくる。ターミナルへのアプローチを通じて、現代人の生に「死のリアリティ」を取り戻す使命と責任を感じている。

《 設立の流れで大変だったこと等 》

- ・約4億5千万円の総事業費だが、県と市からの支援はゼロで、国からの4000万円の補助金しかなく、弱小の法人としては経済的に大きな負担（借金）をしてしまった。
- ・地元地域では集団となると排他的な空気が生まれ、公式な了解をえるのに紆余曲折があった。

《 建物、設備で工夫した点等 》

- ・施設臭さを極力排除したかったが、着工準備にあわただしく、じっくりと図面を練り上げる時間はなかった。周辺の景色や環境を活かした工夫をしてみたかった。交流ホールを設置し、利用者と外部の人が利用できる空間を作った。交流ホールからは外庭と中庭が見られるようになっている。
- ・リビングが広すぎる感じで、作業の導線が長く、スタッフも動きにくそうだ。

《 「地域密着」である工夫 》

- ・昭和30年代に伝統的地域は崩壊した。今何が地域なのか再定義が必要だろう。
- ・新たな地域の核となるコミュニケーションの場として、福祉施設が機能する必要があると感じる。
- ・文化発信の拠点として福祉施設が貢献することも重要だと考える。音楽祭や講演会を開催を

積極的に進めたいが予算をどうするかが問題だ。

・ 今後は相談業務が重要になる。切実で複雑な問題が続出する時代に入ってくる。それを第一的に受け止め、ネットワークを活用しながら解決をはかる軸を福祉施設が担う責任がある。

《 現在、運営・経営上で大変な点、工夫している点 》

・ 一対一で話しをする時間をとったり、外出をしたいが現実には難しい。呼んでも声が届かず、すぐに来てもらえない状況は人間的環境からみれば寂しい劣悪な状態にある。利用者個々の内包する課題に寄り添うには物理的な困難がある。

・ ユニットケアの現状は、一般的に幽霊屋敷状態で、職員を探すことが難しいほどだ。当法人では国基準を越えて人数を配置しているが、弱小法人には経営的にかなり厳しい。

・ 当法人は障がい者の就労支援事業を併設している。厨房の運営はそこに委託し、掃除や暖房用の薪ボイラーの稼働などにも関わり、生活の厚みを生み出している。

・ 介護職は職業として低い評価の代表になっている。専門的な知識や技術に加え、人間として的人格の深さが求められる高度な職業なのだが、求人をかけても応募はほとんどない。

・ 個室になじみの薄い文化にいきなり個室では、特に高齢者は極端な孤独感を持つのではない。自我の確立を大前提として個人の意見を明確にする文化と違って、察しや気配りで生きてきた日本人には、個室の壁は暴力的な断絶になってしまう恐れがある。個室はプライバシーの保護や個人の時間を大切にできる良さはあるが、日本人に合わせたユニットケアの在り方を模索する必要がある。個室によって何を失い何を得るのが理解されるべきだろう。

・ 家族の面会は、個室は有利で家族は訪れやすいだろう。泊まることもできるし、くつろげる。施設が堅苦しい感じにならないよう家族にとっても心地良い場でありたい。

・ 立地が農村部であり、農業の「暮らし」のなかで過ごしている雰囲気は大事にしたい。農作業を眺めているだけでも気持ちは参加できるはずである。

・ 音楽や絵画など、芸術が生活のなかに自然になじんだ場作りを目指している。

・ 終の棲家としての特養は、ターミナルの取り組みが準備されている必要がある。嘱託医や医療機関、看護師などの協働作業となるが、医療の「敗北としての死」ではなく、「死のリアリティ」を暮らしや人生のなかに取り戻す使命を介護現場は担っているととらえている。

・ 利用者さんと家族に、スタッフが加わって出かけることもある。家族ぐるみのお付き合いができることが理想だ。また家族の抱えた課題などが見えてくる場合も少なくない。現代の家族が抱える問題が複雑化していくなかで、専門性の高いケースワークが求められることになる。

《 運営推進会議について 》

・ 実際に運営推進会議が機能しているとは思えない。制度で決められたから義務的にやっているというのが現状ではないか。本来は市民参加と意識向上の機会となるべきだが、そこまで市民意識は高くない。志や問題意識のある若い人材が集まって運営されるべきだと思う。それができれば、新たな地域づくりの核として動き出す可能性が開ける。しかし、問題は地域にはたしてそういう若者がいるかということだ。

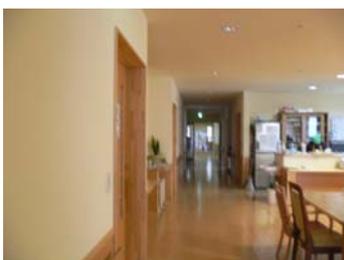
・ 会議のなかで要望がでてくる感じは少ない。行政から情熱や意欲を感じたことはない。

・ 高齢者・介護は、誰にも他人事ではない。これを切り口に、地域社会の現状や未来をみんな

で考える場になればいい。ここから新たな地域コミュニティが生まれる可能性に期待したい。

《 今後の見通し等 》

- ・入居者はそれぞれ大きな人生の課題を抱えている。そうした課題をどう受け止め、どうアプローチするのが施設スタッフは問われる。漫然と管理に終始していれば、簡単に「姥捨て山」になる危険と隣り合わせだ。人生の総仕上げの時に寄り添いながら、死を視野にいれた人生の総仕上げを深く生き抜く、ひとつひとつの創造活動に関与していく姿勢を持ちたい。
- ・ユニットケアは緒に就いたばかりで実験的な部分も多い。西洋の受け売りでは日本人にそぐわないものになる。自然との関わりや対人行動、生死感、人生観などと深く関連してくる。日本人やその世代に合致するユニットケアのありようを見いだしていきたいと思う。
- ・利用者の存在の大きさは果てしない。何かをするのではなく、何もしないで「在ること」の威力を持っている。そうした価値や意味を若いスタッフ個人も社会も学ぶ必要がある。
- ・人材が必要で、幅広い素養と見識を持った、意欲あるスタッフと挑戦していきたい。



ユニット内部



ユニット内部



浴室



廊下



交流スペース

◇地域密着型老人福祉施設入所者生活介護Bのまとめ

- ・設立については、認知症対応型通所介護、認知症対応型共同生活介護の実践をふまえ、最後までお付き合いしたいと考えた。
- ・経営上の工夫として、同じ法人内にある障害者サービス事業所との連携がある。
- ・今後、取り組んでいきたい点は、職員の質をあげること。
- ・利用者、利用者家族へのケアに思いが深く、協働しながら自らのケアを創りあげていこうとする思い・姿勢が感じられた。

地域密着型老人福祉施設入所者生活介護C

運営主体：地方公共団体

(実際の運営は第三セクターの株式会社)

開設年度：2005 年度

定 員：20 名

併設施設：認知症対応型共同生活介護

隣接施設：行政の保健センター、県立病院

併設施設以外に運営主体が運営している事業

：居宅介護支援事業所、訪問介護、訪問看護

訪問入浴、通所介護、短期入所生活介護



《 設立のいきさつ 》

- ・2003 年に行政が、「構造改革特別区域の公設民営型小規模多機能福祉特区」を取得し、設立は行政で、運営は民間で行う形を作った。この特区を取得したのは、全国初だった。
- ・特養設立の前に、在宅複合型施設を立ち上げていた。この地域は高齢化率が高く、施設入所待機者も多いので、特養を建て、待機者を減らしたいという思いがあった。
- ・県の計画のため建てられるのは20床まで、それとグループホームも建てなさいと言われた。この時期、地域密着型サービスの枠組みはなかったし、50床で立てたかった。20床では、採算取れないから。地域からも「20床じゃなく、もっと多く立ててほしかった」と言われた。
- ・実際に設立を主導したのは、運営している民間会社の現副会長。当時は社長と行政の助役を兼務していた。副会長の力が、実際的にも精神的にも大きかった。

《 設立の流れで大変だったこと等 》

- ・設立にあたり、職員に不安はなかった。副会長を信頼していたので、副会長についていけばいいと考えていた。
- ・職員の確保。なるべく、地域の人を採用したいと考えている。看護師の確保は、今も難しい状況。

《 建物、設備で工夫した点等 》

- ・設計屋と全職員との話し合いの中で「使いやすさ」を検討したが、結局動線が長くなってしまった。
- ・施設全体が、コの字型になってる。2つのユニットをつなぐ廊下が長く、移動が結構大変。職員にとっては動きにくく、特に夜勤者の肉体的・精神的疲労が大きく、負担になっている。

《 「地域密着」である工夫 》

- ・近所の方が遊びに来ることはあるが、積極的に交流できているかというと、不十分だと思っている。
- ・地域の人からは関心と言うか、ここでお世話になるんだ、という意識がないわけではないが、

ただし、「申し込んでもすぐにははいれないもんねえ」といわれる。

・民家から離れたところに立地していて、現時点で自治会との交流はないので、これからやっ
てかなきゃいけないとは思っている。

・夏祭りは、ほとんどは家族さんとの交流になっている。もちろん地域の方の参加もあるが、
関係性としては、もう一歩という感じを持っている。

・過去、グループホームの方がいなくなったことがあったが、地域で大騒ぎになることはなか
った。地域住民を含めたネットワークの必要性を感じている。

・今、課題として考えているのは、地域の方にどうやって発信して、どうして出て行こうか
ということである。

・一緒に住んでいる家族は、認知症だと分かりづらい。特養に入って、「こうなので、こうい
う所に気をつけていただけますか」と説明すると、「そうだったんだ」と家族がおっしゃるこ
とも多い。だからか、「まずは、認知症とわかっただけでよかった」、と言われる。だからこそ、
地域に出て行って、介護とか、「施設でこういうことをしています」って発信しなければなら
ないと思っているし、例えば地域に出て、介護のワンポイントではないけど、勉強会をして
いけたらと思っている。

・そういった思いはあるけど、中のことで精一杯なので、できずにいる。隣の保健センターに
ある包括で劇団を作って公演をやっているが、そういう風に出たら素敵だなと思う。

《 現在、運営・経営上で大変な点、工夫している点 》

・赤字ではない状態。

・スプリンクラー等、建物管理は町が相談にのってくれている。

・グループホーム、在宅サービスの部門が会社があり、みんな兼務状態。元々、特養の人員配
置少なかったが、今は逆に特養に配置して、応援に出そうっていう考え方で、特養からグルー
プホームやヘルパーに応援に行く、グループホームの夜勤に入るという状態で、職員の固定配
置ができていない。それには良い面もあるが、こちらの体制がなかなか整わないという面もあ
る。実際、20床だから、まわっていることだと思う。

・現在、利用者は平均年齢約85歳、平均要介護度3.8~3.9、経管栄養8名という状況。すぐ
近くに病院があるため、病状の変化のあるときは通院し、ぎりぎりまで施設で対応し、対応し
きれなくなったら、入院する。

・日中、ちょっとした変化があれば通院。夜間、急変したら、夜勤者の他に宿直者がいるので、
「日中もお世話になったものですけど」と病院にお連れしている。夜間は介護スタッフだけ
なので、かなり不安が強い。病院の先生も理解して下さっている。月1回、病院との連絡会や
勉強会に参加し、連携を深めるよう努めている。

・理想は、「自分が入りたい施設」。できる限り、入所者の希望に添うようにしていて、入所者
さんが「ラーメン食べたい」って言ったら、出前をとってラーメンとったりもしている。

・年に2回、各事業所から集まって、事例検討会を行っている。この施設のスタッフとは月1
回勉強会をしている。そういった取り組みの中から、実際に工夫をしていって充実感がある。

《 運営推進会議について 》

・地域の方からなかなか意見が出ない状況。現状報告、行事、報告、事故、ヒヤリハットの報

告、避難訓練の状況等を報告して、参加していらっしゃる方から意見を訊こうとして、「みなさんからは？」と投げかけても、あまり意見が出てこないのが現状。

・内情を記録し、会議で報告することで、「安心しました」「大変よくやっていたらと思います。」等は、言っている。

・火事は防ぐ努力はできても、地震は防ぎようがないから、地震の訓練をした方がいいという指摘等いただき、勉強になっている。

《 今後の見通し等 》

・今後の課題として、記録の難しさ。ヒヤリハットや事故書類をきちんと記録することに取り組んでいきたいと考えている。

・ボランティアに来ていただき、お話相手になって欲しいと思っている。ボランティアの募集の手段について悩んでいる。

・職員の質をあげていくことが重要だと考えている。会社で質の向上を図るために、進んで社会研修に行くことを推奨しているので、これからも質をあげる努力を行っていきたい。



特浴



一般浴



交流スペース入口



ユニット入口



廊下にある車椅子等の収納スペース

◇地域密着型老人福祉施設入所者生活介護Cのまとめ

・「福祉特区」地域にある施設で、地域の医療・福祉の中核の役割を果たすエリアの一角にあり、公設民営といった点からも、医療との連携等、他の施設との諸条件の違いが感じられた。

・上記でも述べたように、地域の医療・福祉の中核の役割を果たすエリアの一角にあり、民家から離れているため、地域住民がどれくらい身近な施設として感じるかについては難しく感じる部分もある。

・利用者へのケアに対して、非常に細やかな配慮が見られる一方、地域への取り組みの必要性を強く自覚されていた。

地域密着型老人福祉施設入所者生活介護 D



運営主体：社会福祉法人

開設年度：2007 年度

定 員：21 名

併設事業：居宅介護支援事業所、通所介護

併設施設以外に運営主体が運営している施設：

特別養護老人ホーム、認知症対応型共同生活介護
母体である医療法人が病院、介護老人保健施設、訪問看護等を運営

《 設立のいきさつ 》

・1984 年に、特別養護老人ホームを開設した。その後定員を増やすため、改築を考えたがそのスペースがなかった。幸い、新たな土地を地域の方が提供してくださったので、その土地を買って、増床した特養が 2003 年に完成し、入所者も移っていった。

・残った旧特養の建物は十分使えるので、どのように利用するかが課題となった。身体障害者施設も考えたが廊下幅が足りず、改築するにも壁で屋根を支えている構造上不可能で、身体障害者施設への転用は断念した。

・これまで地域で活動してきたこともあり、地域に貢献できるものをと考えた。ちょうど 2006 年に地域密着型サービスの枠組みができたので、最終的に特養として建てようと、行政と協議して決定した。リフォームした後、2007 年度に地域密着型特養として新たにオープン。建物は、新たにオープンするまでの 2003 年～2007 年は空いていて、デイと居宅のみ運営していた状態。

《 設立の流れで大変だったこと等 》

・職員の半分は特養から来てもらったので。半分は経験者。ユニットケアにも慣れてしたが、個室で一人をケアしていると、他の様子がわからなくなり、やはり大変な面はある。

・リスクはつきものだと考えているが、入居者の行動パターンを知っていれば対応できるとも考えている。

《 建物、設備で工夫した点等 》

・リフォームで変わったのは避難口。一部屋つぶし、新たに作り、計 3 か所にした。

・旧特養は多床室で 4 人部屋だった。個室にする際、壁で屋根を支えているので、入口の位置を変えられなかったため、入口は一つで、入ってすぐ Y 字に壁を作ることで 2 つ部屋を作った。

・建ててからわかったが、個室内に三面鏡の洗面台を設置したことで、個室のドアを開けなくても、廊下から職員が利用者さんの様子を確認できる。

・各ユニットに、個浴のための檜の浴槽の浴室を作った。特浴、リフト浴もあるが、利用されているのは 2～3 人で、多くの利用者が、檜のお風呂に入られている。ただ、檜が良いというより、個浴というところが良いようで、介助者と一対一、話をしながら入れるので、楽しい、安心感があると聞いている。

《 「地域密着」である工夫 》

- ・もともと地域で活動してきていることもあるが、もっと地域に開かれた場にしたいとかがえ、一昨年暮れから「地域講座」を開催している。
- ・スタッフを集め、12月～3月、全4回。内容は、冬場の運動不足解消法について等。だいたい20名くらいに参加していただいた。
- ・昨年度は新型インフルのためできなかったが、今年度はまたやるつもり。
- ・地域の反応として、「建物があるのは知ってはいるが、何をしているかはよくわからない」というレベルかなと思う。もっと中身を知ってほしいと考えている。
- ・このあたりの人は、施設に入るより、家族と一緒にという気持ちが本音ではないだろうか。
- ・地域の人は遊びに来るといふより、会いに来るといった感じ。

《 現在、運営・経営上で大変な点、工夫している点 》

- ・経営面では、人件費の面が厳しい。介護職を増やしたいと思うが、人件費を考えると、他が回らなくなるため難しい。
- ・昨年度から夜勤を2名から3名にした。しかし、インフルエンザ等で夜勤3名だと日中回せないと感じたため、今年の3月からは、夜勤を2人体制に戻した。職員もOKを出した。
- ・地域密着で苦しいのは人員配置、そして人件費。小さくても大きくても人員配置は一緒だから、小規模は厳しい。併設の居宅介護支援事業所に看護師資格持つケアマネージャーがいる。もともと兼務だということもあり、看護師は1人なので、手伝いに来てもらっている。
- ・ただ、地域密着は小規模、3ユニットだけなので、気心知れた人たちだけなので、介護の方ではゆったりした気持ちでできる。入所者から見ても、入ったら友達がいたということはないが、家族の方が知っているとかはある。
- ・行政は相談にのってくれたり、協力的で、役場との関係で苦労はない。
- ・現在、入所者の平均年齢は約90歳、平均要介護度3.8、経管栄養4～5名という状況。
- ・看取りについては、家族に意向を聞いている。しかし、特養というものはターミナルそのものであり、一般的に言われているターミナルは、すでに特養はやっていると考えている。
- ・今のところ、施設で亡くなる方は2、3人だが、病院に入院して亡くなる人もいれば、病院で持ち直して再入所してくる人もいる。
- ・隣に関連法人の病院があることは心強い。夜間の急変や入院にも対応してくれる。そういう点では、この施設は恵まれていると思う。
- ・ただ、ここは生活の場であり、老健や病院とは介護の仕方が違う。食が進まない利用者「食べさせたい」と職員が頑張り、何も表情がなかった利用者に表情が出てくることもある。職員は介護することの喜びを味わっているし、職員が頑張る要因だと思う。
- ・今は2カ月に一回全体者会議。職員23名全員から話を挙げてもらう。全体会議は18時半からやるが、みんな集まってくれるし、職員はがんばっていると思う。また、それぞれユニットに責任者はいるので、責任者中心でスタッフで話し合ってもらっているようにしている。

《 運営推進会議について 》

- ・地域住民からも、家族からも意見は出る。家族からは、「ありがたい」「以前いた病院や老健では話をできなかった。こっちに来て話ができるようになった」とお礼を言われることもある。

- ・行政から、行事開催時におけるボランティアの活用等、アドバイスをいただいたりもする。
- ・運営推進会議をやって、地域の人たちの声が聞けるのが新しいと感じている。
- ・行政区長、民生委員、地域の代表が来るので、その人たちに、施設でやっていることを伝えることで、地域に広がるというメリットがあると考えている。
- ・今は定期的なボランティアはいないので、どう活用しようかなと思案中。ただ、なんでもかんでもボランティア、というのもどうかなとも思っている。
- ・ボランティアしたいという声はまだない。こっちから声をかければあるかもしれない。
- ・一昨年までは、地域のボランティアグループが定期的に来ていたが、そのグループが解散し、定期訪問がなくなった。
- ・年行事として、保育園やデイサービスと交流したりということはある。

《 今後の見通し等 》

- ・「地域講座」をもっと開いていきたい、もっとこっちを知ってほしいと思っている。
- ・「地域講座」は当初当施設で始めたものだが、今は法人全体で「出前講座」を考えている。
- ・職員体制についても考えていく必要を感じているし、研修の中身を絞って、それぞれに行ってもらいたいと考えている。職員に勉強してもらいたい内容は、コミュニケーションの他、医療行為、吸引等。いろいろ勉強して欲しい。



玄 関



檜のお風呂



他の浴室



廊 下



集合スペース



Y字型の居室の入口

◇地域密着型老人福祉施設入所者生活介護Dのまとめ

- ・もともと特別養護老人ホームだった建物をリフォームし、上手く活用している。
- ・医療法人が母体であり、医療サービス、福祉サービスともほぼそろっていて、利用者へのケアにおいても、地域への取り組みにおいても、その強みが活かされている。
- ・地域への取り組みについては、法人内をひっばっている部分が感じられた。

地域密着型老人福祉施設入所者生活介護 E



運営主体：社会福祉法人

開設年度：2008 年度

定 員：25 名

併設事業：なし

併設施設：なし

《 設立のいきさつ 》

- ・法人の本部は青森県にあり、介護老人保健施設、デイケア、デイサービス、訪看、訪介等を展開。宮城県でも 2006 年度に、特養を 2 つ設立した。
- ・法人が所属する協同組合が、たまたまここに土地を持っていて、土地の有効活用をしたいと考えていたので、特養に使わせてもらうことになった。
- ・事業推進にあたり、理事会では地域の理解が得られたということで了承いただいたが、先の特養設立で立て続けに公的な資金を使っていたこともあり、一部の助成金を除いて自前で建てなければならないこととなり、資金繰り面で苦労した。
- ・普通、地域密着型は 29 床までだが、25 床までと行政から言われ、どう試算しても収益は上がらないだろうという前提でスタートした。
- ・法人の理事長は北海道出身だが、岩手県にある大学を卒業していて、母校のあるところに恩返しがしたいと考えていた。事業が安定するまで、法人内で多少の持ち出しを覚悟して開設した。そういう意味では、理事長が岩手県の大学卒ということが大きかった。

《 設立の流れで大変だったこと等 》

- ・人員配置。中でも、有資格者の確保が大変だった。開設の時期が職員を集めやすい 4 月からずれ込んで、11 月になったため、職員を確保しにくかった。関連法人からの職員を採用しても、派遣した事業所で欠員を補充しなければならないので、同じ。開設のときに 94% が新採用。関連法人からの応援は、本部の青森から 1 人と前施設長のみだった。
- ・ユニットケアという新しい方式に対して、どうやっていくかのノウハウが充分になく、指導してくれる人もいないため、日々、戸惑っている状況。
- ・1 年たったらたつたで、新しい課題が出てくるので、大変は変わらない。
- ・地域の方の理解を得るために、何十回も足を運び、何度も説明会を開いた。最終的には、ご理解をいただき、現在では地域のお祭りに呼んでいただいたり、施設の行事に参加していただくなど良好な関係が出来ていると実感している。

《 建物、設備で工夫した点等 》

- ・補助金の関係で、すべて木造かつ全部岩手県産の木材で建設。岩手県産の木材を使って安く

なったが、一般的な特養よりは高くなった。

- ・木造は鉄骨より燃えやすいので、スプリンクラー等の防火対策には特に気を使っている。
- ・設計士さんは、関連法人含めお願いするのは今回が初めての方。特養を含め福祉施設設計のノウハウが不足していた部分があり、実際に使っている職員は、非常に不便を感じている。例えば、機械浴の脱衣室と浴室をつなぐ間口が狭く、脱衣後、リフト椅子に乗ったまま浴室まで行けない。浴室までは人力で利用者をお連れしているという状況。クレーン扱いで改修を検討しているが、技術的に難しいようである。また、トイレに使われている電球が、点くまでに時間がかかる（ゆっくり明るくなっていくタイプ）上、茶系統で明るさがない。高齢の方には、ただでさえ見えにくいのに暗くて見にくい。

《 「地域密着」である工夫 》

- ・特養駐車場脇の空き地を、特養が立つ前からリトルリーグが使用していたので、現在も引き続き、法人が整備して無償で貸与している。
- ・入所されている方が子供が走りまわってる姿を見ることができるのは、元気が出るし、とても良いこと。リトルリーグの子どもたちとは、年に1~2回は交流会を行っている。
- ・地域の祭りにも呼んでいただける。話し合いで最終的にご理解いただけたことが大きい。
- ・裏山のようなところを、地域の方と散策する機会を設けている。しいたけづくりもイベントとして計画し、2日間で延べ30名の方々に来ていただいた。

《 現在、運営・経営上で大変な点、工夫している点 》

- ・現在、入所者の平均年齢は約86歳、平均要介護度4.6、経管栄養4名だが、常時吸引が必要な方はお断りしている。ベッド上で寝たきり生活者は2名。待機者は約130名。
- ・座位可能でバイタル安定している方は、外出に連れ出すこともある。
- ・家族については来る方は毎日来るし、遠方の方でも1月か2月に1度はいらっしゃる。
- ・友達がタクシーでこられることもあるし、元お茶の先生はお弟子さんが毎日来られる。
- ・ターミナルについては、いずれは考えていかなければいけないが、看護師の確保、職員教育等、ハードルはたくさんあるので、現段階では積極的に考えていない。常時、看護師がいるわけではないので、いざ臨死の段階で対応できるものがない。
- ・いよいよとなったら協力病院や県立病院に入院という状況なので、ご家族からのターミナル希望に、どう対応していくかというところが課題。
- ・ターミナル以前に、ユニットケアの運営に試行錯誤している状態。ユニットケアは、システム上に問題があると思う。介護度の軽い方が想定されていて、現実とかけ離れてると感じる。
- ・経営的に介護度の高い人を入れざるを得ないということもあるが、入所希望者は在宅でご家族が苦勞されている場合が多く、結果、特養は介護度高い方ばかりになっている。
- ・センサー式のナースコールもつけてはいるが、全室は無理である。

《 運営推進会議について 》

- ・「地域の要望を聴く機会」と考えている。
- ・現在は増床のことが話題になるので、地域の方々の意見をうかがった。ユニットケアはホテルコストがかかるので、低所得者の方が入れよう多床室でもかまわないとの意見が出た。

・去年の3月、地域の方と消防と総合防災訓練を行った。それを機に、地域の方から「地域でも防災訓練したい」との意向をうかがい、相互防災協力を具体的に進めることになった。そして、町内会と防災協定を締結した。いざ火事があった場合には、特養の消火用防火水槽を使ってくださいとお話している。

・受け入れていただいていると感じているが、こちらがどうこうというより、一番は地域の方がここに興味を示してくださったからだと思っている。

《 今後の見通し等 》

・県の計画で60床の枠をいただいたので、できれば隣接して、ここで建てるのがいいと思っている。ただ調整区域なので、景観にかんする縛りということも考えなくてはならないので、どうなるかまだわからない。60床の他に、通所系やグループホームも考えていきたい。

・ちょうど現在増床中で、29床になる。最初から29床建てるより、余計な費用がかかるし、最初から29床で建てさせてくれれば良かったのにも思う。

・課題は人材育成。職員の人数が少ないだけに、一人ひとりのスキルに頼らざるを得ない。

・スタッフとのコミュニケーションについては、こちらはじっくりと話したいが、本人たちがうまく時間を作れない状況。



玄関



交流スペース



廊下



ユニット内



特浴

◇地域密着型老人福祉施設入所者生活介護Eのまとめ

・併設施設、併設事業がなく、完全に単独で運営しているのはある意味珍しく、いろいろご苦労が伝わってきた。

・そんな状況でも、地域と良好な関係を築いていらっしゃるのは、住民の方々と関係構築を積み重ねてこられてきた結果であることがうかがえた。

・もともと東北圏内で幅広く施設運営をされている法人で、他府県の状況にも詳しい。

地域密着型特定施設入居者生活介護F



運営主体：特定非営利活動法人

開設年度：2005 年度

定 員：21 名

併設事業：居宅介護支援事業所、通所介護、介護予防通所介護

《 設立のいきさつ 》

・もともこの建物は中学校だったが、少子化により、中学校の統廃合が行われ、ここは廃校となった。そういう状況の中で、建物の利用について要請を受け、NPO法人が設立された。当初は介護付きの有料老人ホームというよりは、地域に役立つ方法として検討され、健康も含めた介護福祉施設としての利用が最適であると考えられていた。住宅型有料老人ホームとしてスタートはしたが、計画段階ではグループホームという案も出されていた。

・介護保険事業を開始するにあたっては、行政側より様々な指導や意見をいただいた。グループホームの案が出ていたときも、1つの階を利用して1ユニット9名で2ユニットのケアを行いたいと考えていたが、現在の建物のまま、学校の校舎のようなワンフロアの構造において9名×2ユニットという考え方は無理があることから、行政から許可が下りなかった。特養という案は、NPO法人であったため考えになかった。

《 設立の流れで大変だったこと等 》

・学校の建物をそのままは使えないので、改修の必要があった。地域から学校跡地利用の要請を受けた会社があり、そこが改修の費用をだし、改修も担当した。それで、現在は運営の委託を受け建物を借りて運用。契約書に基づき土地・建物の賃借料をおよび貸付金額に対する金利を支払っている。法人の資産で建てたのではない。

・元々介護保険対象外の老人ホームとしてスタートしたが、地域密着型が始まった年に地域密着型の有料老人ホームへ移行。移行の要因としては、報酬の部分が大きかった。NPO法人なので地域密着というのは意識にあったが、最初から地域密着型特定施設入居者介護の施設という考えはなかった。介護付きになっていく中で、重度の人が増えてくるため職員の変化への対応がなかなかついていかなかった。

・地域住民からは反対の声もないが、進める声っていうのもなかった。事業開始して地域密着と謳われているが、実際はそう上手くはいかない。

《 建物、設備で工夫した点等 》

・外見は学校そのものであるが、施設内は木材を使用しているため、施設内の雰囲気は他の施設

に比べて好印象がある。部屋もやや広い。

《 「地域密着」である工夫 》

- ・現在は、地域住民との交流というよりも生活支援の部分に力を入れている。住民とのきっかけ作りは少しずつ行っている。今は足場作りをしている状態。
- ・トレーニングマシーンがある体育館もあるが、利用が伸び悩んでいる。器具や設備が立派なだけに、残念な状況である。

《 現在、運営・経営上で大変な点、工夫している点 》

- ・現在、生活支援に力を入れている。例えば、外出、外食支援がある。リスクはあるけど、その人ができることまで規制させないよという思いがある。リスクばかり気にしていたら「目に見えない拘束」になってしまう。
- ・職員との関わりの中で、生活自体の楽しみを見出していけたらと思って働きかけを行っている。ちょっと前の事例で、プロレス観戦の無料の招待を受け、入居者に聞いてみたところ「行きたい」という利用者がいたので、職員同行で行った事があった。夜の外出ではあったが、利用者の望みを出来るだけ叶えたいと考えている。そのような小さいことから生活支援ができればと考えている。しかし、職員の意識面でまだまだ難しい。
- ・有料老人ホームはある意味何でもありであるため、割と一人出来る範囲が広い元気な方から、認知症、あるいはほぼ寝たきりに近い状態の方までと、それぞれの入居者の人の状態に合わせて対応していかなければならないので、職員の幅広い対応力が求められる。もともと介護保険外の老人ホームだったため、比較的元気な人が多かった。しかし、介護付きとなって、それに対する職員の柔軟性がまだ追いついていないと感じている。
- ・職員の研修について、施設内での研修も職員が勤務時間より早く来たり、勤務が終わった後に残ってやったりしている。職員にとっては大変だと思う。
- ・一方で、職員の雇用定着にも課題を感じている。通勤の利便性が良くないこともあって、こちらが思うような人には、なかなか応募してもらえない。また、定期雇用がないので新卒者を採用したことはない。
- ・利用者の平均年齢は80歳代後半、半分以上の方が80歳代後半以上で、平均介護度は2.9。
- ・医療に関する課題として病院が遠いこと、夜間の看護師が不在であること、介護職員は医療行為を行うことが出来ないことがある。そうすると医療の対応が24時間必要な方（経管栄養や吸痰の処置の対応）の場合、入所を断らざるを得ないケースが出てくる。一か月以上入院となった場合には退所してもらうようになっているが、他の施設への転居も困難になっている。
- ・協力医院がかかりつけの人は、月に1度往診をしてもらっている。また、ちょっとしたことであれば電話で対応してもらっている。それ以外の主治医の人は定期的に受診している。
- ・夜間、休日は県立病院に行くが、県立病院も縮小されている。今年から整形外科も休止となるため、夜間の骨折時の対応がどうなるかと心配している。
- ・利用料は約12万で、加えて加えて介護保険利用による一割負担と、オムツ代・受診・洗濯等に関する実費全額負担などもある。都市部の有料老人ホームと比較すれば安いのかもしれないが、それでもこの地域のことを考えると、高いと思う。制度上、食費や居住費に関する減免、あるいは、介護用品の給付事業による補助を利用することが出来ない。介護付有料老人ホームであって

も、対象者にはオムツ代の一割負担、給付券による補助など、施設・在宅において認められている制度を適用して欲しい。いずれにしても利用者の経済的負担は大きいと思われる。

《 運営推進会議について 》

- ・地域密着型施設であるため、運営推進会議を定期的に（隔月）行い、施設の運営状況についての報告や、情報交換を行っている。
- ・年度初めに出席者の依頼を行うが、なかなか快く受け入れてもらえないことも多い。特に、地域住民の代表に関しては協力を得ることが難しく、人選に苦勞もしている。

《 今後の見通し等 》

- ・基本的には、引き続き生活支援の拡充に取り組んでいきたいと考えている。そのためには、職員の定着が必要だと感じている。定着しないと、生活支援の拡大もなかなか行えない。研修等で職員の質も上げていきたいが、やはり人員不足の問題が解消しないと、利用者の生活支援も上手くできない。
- ・火事や地震の際の対応も充分とは言えない状態なので、きちんと取り組んでいきたい。
- ・施設長として行っていきたいことと、理事長あるいは現場の意見との間で、思うように出来ないことも多いが、いろいろと話をしていくことが重要だと思っている。理事長や職員と綿密にコミュニケーションをとって、ハード面もソフト面も充実させていきたい。



事務所前



応接スペース



交流スペース



隣接している体育館



1階廊下



居住スペース廊下

◇地域密着型特定施設入居者生活介護Fについてのまとめ

- ・外見はいかにも学校だが、中は完全に施設で、おもしろい形であった。
- ・学校の跡地利用として、ひとつのモデルとなるのではないかと思うが、ユニットには対応しにくいのは難点かもしれない。

岩手県における地域密着型サービスの現状等実態調査：聞き取り調査まとめ

・地域密着型といっても、運営主体がもともと行っていた事業やサービスによって、設立にあたって、志したベクトルに違いが見られた（例：在宅ケアの積み重ね→施設ケアへ、大型ケアの積み重ね→個別ケアへ、建物の有効利用の手段として等）。これは、特に地域密着型サービスの枠組みができた、2006年以降に設立された施設の特徴と感じられた。一方、それまでに実践の積み重ねがないところは、まさに一からの積み重ねが行われていた。どちらにしても、大型ケアの経験者が多い中、特別養護老人ホームにおけるユニットケアに対する模索があったことが感じられた。

・行政主導というよりは、現場で実践に携わってきた人たちの思いによって、設立されている傾向が強い。高い高齢化率、特別養護老人ホーム入所の待機者の増加等、利用者のニーズ、地域のニーズを敏感に察知し、それらに応えようとしている結果であると言える。

・運営主体、母体施設、隣接している施設等、違いが大きく、またそれらが、実際の運営に及ぼしている影響は大きい（例：人員面での連携・交流、設備の共有、医療との連携など）。連携できるものが多いと、いろいろな局面で、柔軟に運用・活用できることがうかがえた。

・どの施設も今後の課題や現在工夫していることに、職員の質の確保や研修への取り組みをあげていた。職員の確保はどの施設も苦勞されており、特に看護師の確保には苦勞されていたところが多い。介護にたずさわるスタッフについては、資格取得者よりは、地元で、仕事として継続される人が優先して雇用されている。実際、福祉の仕事の経験者よりは未経験者の方が多いようである。しかし、だからこそ、現場で育てていくことが重要となり、職員の質の向上が求められている状況であると理解される。

・職員の質の確保が重要となるのは、利用者も職員も少ない中、職員の対応やケアが、サービスとしてダイレクトにあらわれるということも大きい。

・看取り／ターミナルケアへの取り組みは、医療機関との連携の状況、看護師の確保の状況、配置されている看護師のスキル等の諸条件により、各施設でスタンスがかなり異なっている。

・地域密着型サービスだけに限らないことであるが、施設長のカラーも大きい。施設長以外にリードする存在の有無（法人理事長等）も、地域密着型サービスの方向性を決めていくうえで重要であることがうかがえた。つまり、施設長や法人理事長等が、どう地域を理解し、地域の福祉に貢献していく意向を持っているかが重要だということである。また、そういったリードする存在に対して、職員が大きな信頼を寄せていることもうかがえ、組織内における職員間の信頼関係の重要性もうかがえた。

・ただ、「地域密着」という部分が、上手くいっている、上手くいっていないは、地域の状況にも影響されるように感じられた。何をもってして「地域密着」と考えるかも、施設や地域によ

て異なるが、地域住民が地域密着型サービスに何を求めるかについては、地域住民によって異なるからである。もちろん地域住民の意識を育てていくことも、地域密着型サービスに求められる役割になるだろうが、短期間で成されることでもなく、時間をかけながら、まさしく地域住民との協働が必要なこととなり、簡単にできることでもないだろう。

- ・地域密着型特養は利用者のケアの充実、それはターミナルケアも含めた利用者の重篤化にも対応していく必要があるということでもある。それには医療との連携が欠かせない。一方で、地域への働きかけも行っていくことが求められていて、非常に重い責任と負担を担っていることを改めて感じた。